

二国間交流事業 共同研究報告書

令和4年4月22日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[代表者所属機関・部局]

明治薬科大学・薬学部

[職・氏名]

教授・赤沢 学

[課題番号]

JPJSBP 120198831

1. 事業名 相手国: 韓国 (振興会対応機関: NRF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 前糖尿病から糖尿病への推移予測と疾病負荷の国際比較

(英文) Global comparative study on prediction and disease burden of the transition from pre diabetes to diabetes

3. 共同研究全実施期間 平成31年4月1日～令和4年3月31日 (3年0ヶ月)

4. 相手国代表者(所属機関・職・氏名【全て英文】)

College of Pharmacy Yonsei University, Associate Professor, Euna Han

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		1,481,684 円
内訳	1年度目執行経費	786,318 円
	2年度目執行経費	695,366 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究全実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	7名
相手国側参加者等	7名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	6	0	1(0)
2年度目	0	0	0(0)
3年度目	0	0	0(0)

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 本委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は本委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流実績の概要・成果等

(1)研究交流実績概要(全期間を通じた研究交流の目的・研究交流計画の実施状況等)

韓国では、診療報酬明細(レセプト)や健診結果などの医療情報を国がデータベース化し、それを活用して薬物治療の使用実態、有用性や安全性評価を行う薬剤疫学研究が日本に先行して実施されている。両国で利用可能なデータベースを比較検討し、共通の研究計画書に従って前糖尿病から糖尿病治療までの患者追跡を行うことで、治療実態の比較や疾病負荷の推計を試みた。コロナ禍で2020年度以降の研究交流が制限され、共同での論文発表には至らなかったが、韓国で開催された学会で、日本におけるデータベース研究の紹介や研究成果の報告を行った。また、この研究交流から得た知見を使って、別プロジェクトの論文発表につながった。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

韓国側が使用したナショナルデータベースに関する情報は、厚生労働省が整備した NDB データの使用申請に役立ち、「日本における前糖尿病から糖尿病への推移予測と疾病負荷の推計」という学術研究への使用許可を得ることが出来た。研究交流によって得られた知見は、データベース研究を不可欠な研究デザイン立案やデータ解析に役に立った。最終年度には、NDB データ解析結果をまとめ、現在論文投稿の準備を進めている。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

新たに台湾並びに日本のデータベース研究者を加えて新規の国際共同研究プロジェクトを立ち上げた。台湾、韓国、日本の3つの異なる診療情報データベースを用いて、心房細動治療による出血イベント発生後の抗凝固薬投与に関する検討を実施している。このプロジェクトは、2020 年度に他の研究助成金を得ることが出来、日本の研究成果については論文投稿の準備を進めている。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

本研究交流がきっかけで、アジアでの薬学教育を議論する会議(Asian Association of Schools of Pharmacy)で、日本の薬学教育におけるデータベース研究について発表する機会を得た。この内容は、韓国だけでなく、インドネシアの学生にも興味を持ってもらい、日本に留学したいという連絡を受けた。留学計画について具体的に相談していたが、残念ながらコロナ禍でこの留学生受け入れはできなかったが、国際共同研究は、他国の学生に日本の薬学教育・研究に興味を持ってもらうきっかけになった。今後も国際交流にも貢献して行きたい。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取り組み、成果)

日本側の参加者には、社会人大学院生並びに学位取得直後の研究者を加え、研究計画の作成、データ解析、研究成果の発表に中心的な役割を担ってもらった。彼らにとっては、初めての国際共同研究の参加であり、共通言語である英語を使う会議等への参加経験は、国際学会での発表並びに国際誌への論文投稿に役立った。2020年度以降は Web 会議が中心になったが、英語で発信する経験になったと思われる。

(6)将来発展可能性(本研究交流事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本研究交流の研究者に加え、新たに韓国並びに日本のリウマチ専門医に参加してもらい、新規の国際共同研究プロジェクトを立ち上げた。糖尿病領域と同様に、リウマチ疾患を中心に、バイオ後続品に関する使用実態や臨床成績について韓国と日本でデータベース研究を行い、その共通点や相違点を見いだしながらバイオ後続品の普及に資する研究を行う予定である。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記述してください)

特になし